

# 雨宮敬次郎

あめみや けいじろう  
1846 - 1911

## 近代国家・日本の創造を目指した起業家



中央線  
敬次郎の生家近くから見る中央線と特急あずさ

### 中央線と雨宮敬次郎

#### 中央線開通への熱い思い

中央線八王子―甲府間の開通を切望した敬次郎。その開通直前には伊藤博文を自宅に招き、県内外の有志を集めて盛大な祝宴を催した。



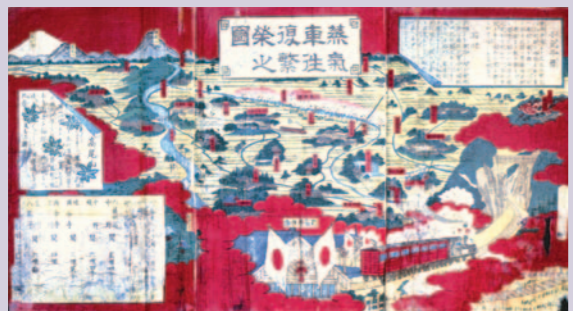
敬次郎の生家（改築前）  
隣には伊藤博文が泊まった離れがある



雨敬橋  
重川に架かる「雨敬橋（あめけいはし）」は敬次郎が郷土に残した社会事業の一つ。今もその名を残している



中央線笹子トンネル西口



蒸気車往復繁栄之図（明治22年）  
甲武鉄道開業時の新宿から八王子までの観光地や村々の様子が描かれている



小金井名所図会（明治39年）  
明治時代の『風俗画報』の表紙。当時名所として有名だった小金井の桜を見に訪れた人であふれる国分寺駅



県立博物館 かいじあむ  
「山梨の自然と人」をテーマにした参加体験・交流型の博物館。雨宮敬次郎に関する資料も展示

県立博物館  
笛吹市御坂町成田1501-1  
TEL 055-261-2631  
かいじあむ 検索

明治の文明開化の中で常に時代の先を読み、鉄道や製鉄の興業に手腕を振るった雨宮敬次郎。起業家であり国の発展のために社会的事業に取り組んだ人でもあった。

#### 中央線の基礎となる山梨鉄道を発案計画

弘化3（1846）年、山梨郡牛久保村（現在の甲州市塩山牛久保）の農家の次男として生まれた敬次郎は、14歳から商人を志して行商生活に入った。

明治5（1872）年、開港後の横浜に移り、洋銀相場や生糸、蚕卵紙などの取引で富を築き、明治9（1876）年には欧米へ渡航。先進資本主義諸国でさまざまな文明文化の知識を得て、帰国後は大いに時代を先取りするようになる。

明治20年代に入ると、富国強兵、殖産興業を図るには、交通機関の発達と製鉄事業の興起を

明治36（1903）年に甲府まで開通した。明治39（1906）年には鉄道国有法が公布され、甲武鉄道は国有化された。

これは、敬次郎が以前から訴え続けてきた「鉄道国有論」の実現であり、甲府までの路線もかつて敬次郎が調査した路線とほぼ同じだった。また敬次郎は当時、「鉄道国有論」とともに「鉄道広軌論」も主張。鉄道を長距離かつ高速化するために広軌で敷設すべきだというもので、それはま

図らなければならぬと、鉄道と製鉄の経営に重点を置く。

明治21（1888）年には、中央線の前身となる甲武鉄道の取締役に就任。甲武鉄道は新宿―八王子間の運行を予定していたため、甲州の人々が恩沢を受けることができないとして、八王子―甲府間の鉄道敷設を目的にした山梨鉄道の設立を計画し自ら測量して鉄道局に建設を願った。

常に時代の先を見据え社会事業の興起に尽力  
山梨鉄道の建設は実現しなかったが、明治25（1892）年に国による中央線の鉄道建設が決定。

さに現在の新幹線に通じている。常に時代の先を見据え、社会事業に取り組んだ敬次郎。明治34（1901）年に東京商品取引所（現在の東京工業品取引所）の理事長に就任し、明治40（1907）年には17の会社の経営に携わるなど、甲州財閥の一人としてもその名を知らしめた。敬次郎が情熱を傾けた中央線の開通は、山梨に近代化をもたらし、今日の発展へとつながっている。